まえがき

一般の有権者の政治行動や政治選択の背後にあるメカニズムを，どのような観点から説明することができるだろうか。そのためのアプローチとして多くの研究者が依拠しているのは，政治行動の背後にある有権者の心理に着目するというものである。政治学では一般的に，このアプローチは政治意識論や政治心理学と呼ばれている。意識調査の分析や実験を通じて，政治選択の実態などを明らかにする点が，このアプローチの特徴である。実際に本書で紹介する研究の多くも，計量的な手法によって有権者の心理傾向を論じたものである。政治学と聞くと，現実政治に対する評論や啓蒙をイメージしてしまうかもしれないが，科学的なデータ分析に基づき政治の実態解明を試みる研究もある。政治意識研究は，政治学分野におけるその代表格といっても過言ではないだろう。

本書『政治意識研究の最前線』は，政治意識に関する12の重要トピックについて蓄積された知見を体系的にまとめたレビュー論文集である。読者として主に想定しているのは，政治学の基礎学習を終え，これから専門的な内容について学びを始めようとする学部学生や大学院生である。本書所収の論文は，いずれも当該トピックに関する最新の知見を踏まえたレビューを目指して執筆されたものである。これから本書所収のテーマについて研究しようと考えている学生にとって，本書は最適な教材となっている。学部や大学院での輪読の際に，あるいは，卒業論文や修士論文，リサーチペーパーを執筆する際の道標として，本書を大いに活用してほしい。

政治学にあまり馴染みがない人や，これから学ぼうとする初学者の人も，本書をぜひ手に取り，読み進めて頂ければと思う。本書所収の論文は，いずれも数式や注などを極力用いず，さらに，平易な文章でわかりやすく書くことを重視したものとなっている。必ずしも政治学を専門とするわけではない人であっても，本書は問題なく読み進められる論文集だと確信している。

もちろん，興味がある章に限定して読み進めることも可能である。本書は後述するように，あくまで独立したレビュー論文をまとめたものである。第**1**章

から順に読み進めていく必要はなく，特定のトピックに関心のある人は，関連する章だけ読むということでも構わない。ただ，可能な限り，すべての章に目を通してほしい。関心のないトピックについて，何が，どのように解説されているかがわからない場合は，それぞれの章の冒頭にある要約を読んでほしい。どのようなことがその章で議論されているか，すぐに理解できるだろう。

本書のレビュー論文集としての特徴は，大きくは３点ある。第１は，章あるいはトピックによって相違はあるのだが，いずれの章についても，それぞれのテーマに関する基本概念や理論枠組みに関する詳細な説明以上に，先端の知見を踏まえた先行研究のレビューに重きをおいている点である。Webサイトなどで検索すれば容易にわかることではあるが，政治心理や政治意識に関する教科書は，既に多く出版されている。本書のターゲットはあくまで既に基礎学習を終えた学生や院生にあるため，既存の教科書やレビュー論文などで解説されている内容については必要以上に言及せず，その代わりに，ここ10年ほどの間に明らかになった新たな知見やメタ分析の結果について，積極的に紹介することにした。基礎的な概念等の解説が多くの章で省略あるいは簡略化されているため，政治意識研究に馴染みのない人からすると，物足りなさやわかりにくさを感じてしまうかもしれない。その場合は，既存の政治心理学等の教科書に目を通すことを推奨する。その上で，本書を読むことで，ここでの狙いや政治意識についての理解は深まるだろう。

第２の特徴は，それぞれの章の執筆者は，当該テーマに関する知の生産者という点である。編者が執筆を依頼した研究者はいずれも，当該テーマに関する学術論文の執筆経験があり，かつ，今も国内・国外の査読付学術誌に論文を投稿し続けている人物である。そのテーマの中で共有すべき文献（literature）を生み出してきた研究者だからこそ，Chat-GPTなど生成AIではなし得ることのできない，先端の知見まで含めた質の高いレビュー論文を執筆することができる。そのような思いもあり，編者の方針として，可能な限りこれまでに自身が執筆した論文を１つ以上，レビュー論文の中に含めることを執筆者には求めた。自身の研究をレビューの中で引用できることは，当該トピックに関するレビューの執筆者としての適格さを示す証左だと考えたからである。

第３の特徴は，各章で何をどのような構成で論じるかは，当該トピックを担

当する著者に原則委ねている点である。レビュー論文集の中には，章の構成などに統一感を持たせようとするものもある。しかし，本書としてはそのような方針は採用しなかった。何をどのように伝えるべきかはトピックごとに最適解が異なること，また，そのための構成や内容は執筆担当者にしかわからないと考えたためである（ただし，レビュー内容の重複がある場合は調整するなどの編集作業は行った）。どの文献をどの文脈で引用するかも執筆者に委ねたため，同じ論文が異なる文脈で紹介されたりしている。この点も，本書の特徴である。

本書は，政治意識の形成過程をレビューする第Ⅰ部，主要な政治意識や態度の実態などをレビューする第Ⅱ部，政治意識をめぐる諸課題をレビューする第Ⅲ部より成る。各章ともに，これまでの教科書等では十分な検討がなされてこなかった知見を紹介するなど，興味深い議論が展開されている。その中でも本書の特徴として指摘できるのは，課題をめぐる第Ⅲ部だろう。政治意識は様々な社会的課題と関わる。政治意識研究そのものが，課題を生み出すこともある。第Ⅲ部の各章は，そのような課題に関わる先行研究をレビューしている。例えば，本書では政党支持ではなく「政治的分極化」について議論している。その理由は，政党支持そのものではなく，この分極化により生じる問題や課題が，現代社会で深刻化しているからである。また，人びとの意識を明らかにするには，様々な方法論的課題に対処する必要があるが，その方法論をめぐる論争が，新たな火種を生み出してしまうこともある。第Ⅲ部は，このような様々な政治意識をめぐる課題を扱うレビュー論文によって構成されている。

本書の企画を法律文化社の八木達也氏より打診されたのは，2022年の３月頃であったように記憶している。そこから２年以上を経ることになってしまったが，ようやく出版のはこびとなった。各章の執筆を快諾してくださった先生は当然のこととして，原稿を綿密にチェックしてくださった八木氏の助力がなければ，本書の出版は不可能であった。執筆を担当してくださった先生方と，編者の突然の要求・要望にも根気強くお付き合いくださった八木氏に，ここに改めて感謝の意を表しておきたい。

2025年１月

善教将大